

艦娘と提督の小旅行

fire—cat

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

【村雨と小笠原旅行 in 2018】で村雨の鎮守府と提督の世界が繋がった以降の小旅行（長くて2泊3日）ネタです。

※小笠原関係以外の旅行ネタです。

※小笠原以外のイベント（祭や初詣等）も掲載する可能性もあります

※時々タグの変更を行います。

※4泊5日以上の旅行を扱う際は小旅行が中旅行、海外旅行に代わるかもしれません。

目次

白露型と温泉 (+ α) 旅行

温泉と薔薇園

白露型と温泉（十α）旅行 温泉と薔薇園

「はあー…休まりますねえ」

カフェオレ色の髪をターバンのように束ねた少女がのんびりとした声を上げていた。

「ホント良いお風呂だよね。庭園も良いし。蛍が舞う夏に来たかったな」

明るい茶色の髪を結いあげた少女が浴槽の壁に寄り掛ったまま庭園を眺めている。

「もう少し先に行くっぽい」

歩きながら先に行こうとする亜麻色のストレートヘアをヘアキャップでまとめた少女の姿。

「あ、ダメだよ、夕立。屋根から出ちゃうと上から見えちゃうよ。見られてもいいなら構わないけど」

それを窺めるセミロングの黒髪とサファイヤ色の瞳を持つ少女の忠告に

「それは困るっぽい。夕立、提督さん以外には見られたくない」

慌てて戻る夕立と呼ばれた少女。

「時雨姉、それ、ホントなの？ 提督の冗談だと思ったんだけど」

カフェオレ色の髪をターバンのように束ねた少女が疑問の声を上げても

「ホントだよ、村雨。来る前に提督と一緒にエレベーターに乗って確かめたから。多分ホテルの人气付いてないんじゃないかって」

EVに乗ってみた風景を思いだす時雨と呼ばれた少女。

群馬の北部山間にある、とある温泉。

白露・時雨・村雨・夕立が来ているのは村雨が提督の元に遊びに来ていたときに見つけた一枚のチラシが発端だった。

「提督、これってどこ？」

自身の提督の家に家庭菜園の手伝いに来ていた村雨が一枚のチラ

シに目を止めた。

「ん？ ああ、時々くる宿の紹介か。ここは……群馬の温泉だな」
大きく胸元が開いたラフな部屋着でソファーにうつ伏せで寝転びながら自家製のゴーヤチップスを食べていた村雨をなるべく視界の外に置きながらその手元を一瞥する男。

「温泉かあ。行ってみたいなあ。ダメ？」

「行ってもいいけど、村雨だけと行くと村雨がいろいろ言われな
いか？ 前にいろいろ言われたって言っていたよな？」

「そうなのよね。飛龍さん達は未だこっちに来れないからお土産持
つて帰れば何も言わないし、五十鈴さんや名取さんは提督と一緒に一
人づづ祭り見物したし、初詣や梅見も皆で行ったから余り言ってい
わね。ただ駆逐艦娘でケツコンカッコカリしている娘がね、羨まし
がるのよ」

村雨がコロンと仰向けに身をひっくり返しながら言うその言葉に
少しだけ興味を持つ男。

「誰？ その物好き」

「具体的に言おうと時雨と夕立。嬉しい？」

村雨の悪戯気な視線を受け

「あの二人か……。結構一緒にいると思っただけだな。他の娘達は
？」

村雨の鎮守府と男の自宅が繋がってからは遊ぶ機会も多く、時雨と
もケツコンカッコカリを行ってからは車中泊旅行に出かけることも
それなりにあった2人の姿を思い浮かべる。同時にケツコンカッコ
カリを結んでいる他の艦娘の姿も。

「潮ちゃんは誘っても恥ずかしがっちゃって来ないわよ。ケツコン
カッコカリをしていない娘は遠慮してるみたい。五月雨も初期艦だ
から鎮守府を留守にできませんって。たまには鎮守府に来て五月雨
達と遊んであげてよね」

鎮守府になかなか遊びに来ない、来ても飛龍を始めとするケツコン
カッコカリを結んだ大型艦娘の部屋に籠って過ごす男に、妹の姿を浮
かべ苦言を呈する村雨。

「あの二人を連れて旅行でも行くか。あ、そうなると白露を連れて行かないと拗ねるよな」

元気な白露型長姉の姿を浮かべる男。

「そうね。それと私も除け者にされちゃうと拗ねちゃうぞつと」

「よし、白露型の4人で行くか、温泉」

その言葉に何となく邪なものを感じた村雨が身を起こし坐り直す。

「……混浴はだめだからね」

「白露とはケツコンカツコカりはまだだからな。混浴温泉にはいかな
いよ、まだ」

鎮守府で初めて会った時の様子が脳裏に浮かぶ男。

「まだ、ね。ケツコンカツコカリしたら行くんだ。混浴温泉」

そんな男の表情を見て頬を膨らませる村雨。

「もちろん、皆スタイル良いしな。嫁なら手出してもいいだろう？」

村雨に案内された白露型の部屋で初めて見た、歯ブラシを咥え頭を拭いていた上半身裸トッブレスの下着姿で此方を振り返りきよとんとした目で見ていた白露の姿を浮かべる男。

「このスケベ提督!!」

締めりのない表情を見て何を思い出したかピンときた村雨が近くにあった男の足を思いつきり踏みつけたのは当然の結末であった。

そんなやり取りから2週間後――。

秘書艦から外した村雨を呼び出し、男が告げる。

「宿取れたぞ。連休明けの金曜日から1泊2日だけだがな。仕事も休み取ったからな」

「ホント? やったあ。白露姉も一緒?」

燥ぐ村雨。男も釣られたように燥きながら

「もちろん。人数は5人分予約したぞ。宿泊プランも温泉&寿司食べ放題だ」

そんな言葉を聞いた村雨。

「え? 食べ放題!? ホント? ありがとう」

男の腕に飛び付きひとしきり喜んだ後、ふと村雨が尋ねる。

「部屋は何部屋取ったの?」

その言葉に視線を逸らせながら

「一部屋」

「え？」

「だから、一部屋しか取れなかったんだよ。ということで全員一緒の部屋」

ジト目で男を見る村雨。

「狙ったでしょ。それで広さは？」

「和室12畳間」

「……まあ5人でそれならいいかな」

溜息を吐きながら鎮守府に戻る村雨。

旅行の事は既に鎮守府の皆知らされていたが、詳細を聞いた艦娘達の間から悲鳴が上がり、念のため聞いた参加希望で村雨の他に参加を希望する艦娘は白露、時雨、夕立だけであったのは言うまでもない。

「良い天気ね」

男の世界では5月の長期連休が終わり、村雨の鎮守府でも春の攻勢が終わった翌週。

「しかし、今回の攻勢は結構良かったな」

男の運転で高速道路をコンパクトミニバンが走る。

「うん。神威さんが来てくれたでしょ。秋津洲さんにゴトランドさんにコマندان・テストさんにも出会えたし、赤城さんと大鯨さんの艀装が三つも手に入ったもんね」

助手席の村雨が攻勢の戦果(?)を振り返る。

「それにしても春雨にはなかなか出会えないなあ」

ぼやく男。

「私も春雨には早く会いたんだけど……ね」

そう言つて男を見遣る村雨。

「僕も早く春雨に会いたんだけど？」

そんな村雨を見て後ろから身を乗り出し男の耳元で囁く時雨。

「お、ちよ、危ないからやめなさい」

耳にかかる時雨の甘い吐息を意識し男が慌てながらもハンドルを

捌く。

「ちよつと、時雨姉、危ないからダメだつて」

「時雨、危ないことしちやダメ」

妹二人から注意が飛ぶ。

「時雨……お姉ちゃんもそういう真似は感心しないわね」

時雨の腰を押さえ窘めながら座席につかせる白露。

「ごめん。僕も提督ともう少し話したかったから」

シユンとする時雨に

「焦ったぞ。もう少ししたらサービスエリアにつくから、それまでは、な」

ルームミラー越しに時雨を見遣る男。

「うん」

そう言うのと外の風景を見つめる時雨であった。

「到着つと」

出発地のICからトンネルやJCTを経て数時間。上里SAで1回目の休憩を取る一行。

「んっ」

男が体をゆっくりと伸ばす。

「提督」

時雨が男に呼びかける。

「時雨。忘れたか？ 周囲に他人がいるときは提督呼び禁止。提督以外で呼ぶようにな」

「あ。うん、お…父さん。ごめん」

いつもなら提督呼びの時雨が躊躇いがちに「お父さん」と呼ぶ。

「あく。時雨もそうだったか。まあ良いか」

そういうと時雨の頭に手を伸ばす男。

「お、父さん？」

時雨の躊躇いがちな声を受けながらわしやわしやとその髪を撫でつける。

「わっ。止めてよ、髪が乱れちゃうじゃないか」

「ん？ 止めて良いのか？」

そう言うと男の手が引つ込まれる。

「あ」

聊か残念そうな声の時雨

周囲の姉妹たちがその様子を見ながら何事か相談していた。互いの顔を見つめ頷く時雨を除く姉妹。

「お父さん」

そういう声とともに時雨が男に体当たりをしてくる。

「おっと。大丈夫か？ 時雨」

時雨を受け止めた男が声をかける。

「あ、ご、ごめん。何するのさ、白露」

男に謝ると自分の体を勢いよく押した長姉に抗議をする時雨。

そんな抗議を受け流し白露と村雨が

「ね、お父さん。時雨、貸してあげるね」

「時雨姉、お父さん貸してあげる」

そう言うと夕立を連れカフェに入る3人。

「何だったんだ……？」

呆然として呟く男の腕を時雨が遠慮がちにとる。

「ん？ どうした、時雨？」

「別に……只こうしていたいんだ。て…お父さんとはこの頃あまり話せてなかったし」

「そうか」

そう呟くと男が腕を組みなおす。

「て、……お父さん」

「嫌だったか？」

「ううん、嫌じゃないよ。でもどうして？」

「なに、娘に寂しい思いをさせていたのに気が付かなかった悪い父親だからな。嫌じゃなければ少し土産物屋でも見に行くか？」

「見るだけ？」

首を傾げて男を見上げる時雨。

珍しい時雨のおねだりに、

「そうだな。欲しいものがあつたら言いなさい。他の皆には内緒で何

か買ってやろう」

そう言うと促すように時雨の背に手を回しながらシヨツピング
コーナーに歩みを進めていった。